

ブータンの制限ツーリズムと GNH (Gross National Happiness)

親 泊 素 子*

キーワード：制限ツーリズム，エコツーリズム，GNH，公定料金制度

はじめに

「最後の理想郷」といわれるヒマラヤ小国，ブータン。最近，日本人の間でブータン訪問がブームになっている。2007年にブータンを訪れた日本人観光客数は2,008人。ブータンの外国人訪問数の9.52%を占める。なぜブータンが日本人に注目され始めたのだろうか？⁽¹⁾

一つには養老孟司，五木寛之といった著名人がブータンを訪れ，マスコミでその素晴らしさを語っていることだ。もう一つはブータンのユニークな開発理念の「GNH」が注目を集めているということである。「GNH」(Gross National Happiness)とは「国民総幸福量」と日本語で訳されており，「国の発展指数は単にGNPの規模を拡大するのみならず，同時に国民総幸福量を考えることが重要である」との理念から，経済発展より国民の幸せ感を国の発展の指標にしようというものである⁽²⁾。したがって，国の開発計画委員会の名称は“Gross National Happiness Committee”と命名されているほどである。そして，すべての開発はこの委員会のチェックを受けなければならないことになっており，過度の経済発展をコントロールする役割を担っている。かつて，ブータンのジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王は，

「ブータンは二週遅れのランナーと言われようと，ゆっくりとした開発をしながら，豊かな国づくりを目指すのです」と述べられ⁽³⁾，ブータン政府は慎重に国の開発計画をたててきた。だが，今の二週遅れのランナーが観光の分野で速度を上げて走り始めた。

ブータンは「High Value, Low Volume」の観光理念をかかげ，観光客数を制限してきた⁽⁴⁾。その結果，ブータンの観光は「restricted tourism」とか，「controlled tourism」(制限ツーリズム)とも呼ばれ，年間のブータンへの外国人観

表 年間観光客数

年	観光客数	年	観光客数
1974	274	1996	5,138
1983	1,979	1997	5,363
1985	1,895	1998	6,204
1986	2,405	1999	7,051
1987	2,524	2000	7,559
1988	2,199	2001	6,393
1989	1,480	2002	5,599
1990	1,538	2003	6,261
1991	2,106	2004	9,249
1992	2,763	2005	13,626
1993	2,984	2006	17,344
1994	3,971	2007	21,094
1995	4,765		

出典：Royal Gov. of Bhutan, National Environment Commission, The Middle Path: National Environment Strategy for Bhutan, 1988, Ministry of Economic Affairs, Dept. of Tourism, International Tourism Monitor: Annual Report 2007, 2008

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 環境政治学

観光客の入国数は、他のアジア諸国と比較し、極端に少ない数であった(表1)。また、その制限が更なる稀少価値を生み出し、ブータン観光への憧れと魅力を増大させてきた。しかし、ブータンが世界的に知られるようになり、多くの外国人観光客が訪れるようになってきた結果、ブータン政府は観光客の受け入れを増やしてきており、今後5年間に6万から7万人を受け入れることが出来るだろうと述べている⁵⁾。ブータンのこういった観光の拡大政策は、とりまなおさず観光収入の増大を見込むものであり、経済発展を期待することに他ならない。そして、それはブータン国民の生活を豊かにし、まさに国民総幸福量を実現するものにつながるものではあるが、一方ではそういった、ブータンの観光客増加と、その受け入れに対する施設整備の拡大は、ブータンの一番の魅力としてきた「秘境」とか、「手つかずの」魅力と反比例するものでもある。2008年秋、3年ぶりに現地調査のためにブータンを訪問したが、驚くほど観光の施設整備が進んでいた。一回目の現地調査を実施した2000年は、タイのバンコック国際空港経由でブータンのパロ空港に降り立った時には国立公園の中に到着したかと思うほど、自然豊かな地に着陸したのである。無論現在でも、パロは自然豊かな景観が広がっているが、その当時と比べてはるかに市街化してきており、首都ティンブーまでの道路もきれいに舗装整備され、先進国のハイウェイと変わらない心地よさである。

そこで、本研究は、過去4回におけるブータンの現地調査を通して、ブータンのユニークなツー



図1 ブータンの位置

リズム政策を整理してみるとともに、その発展に伴うディレンマについて考察してみた。本論をまとめるにあたり、現地でのブータン中央政府高官、ブータンの国立公園事務所、ブータンのツアーオペレーター、王立ブータン自然保護協会(RSPN)の自然保護NGO、JICA、JICA青年海外協力隊及びシニア海外協力隊メンバーなどの多くの方々のご協力があったことに感謝の意を申し上げたい。

I. ブータンと日本

ブータンは、ヒマラヤ山脈南側斜面に位置した東西約300 km、南北150 kmの陸地に囲まれた国である。国土面積は46,500 km²で、これは日本の国土面積のほぼ8分の1、九州の1.3倍の面積で、人口は1998年の政府推定では638,000人である。北西及び北部はチベットに、残りはインドによって囲まれている。東部はインドのアルナチャル・プラデシュ、南部はアッサムと西ベンガルに、西はシッキムに隣接している。したがって、インドとの関係は大変深い。地形は国全体が険しい山岳地帯となっており、標高100 mからチベット国境のクーラカンリ頂上の7,554 mとかなりの標高差がある⁶⁾。今回の調査でも標高2,400 mの首都ティンブーから3,150 mのドチュ・ラ(峠)をとおり、1,350 mのブナカへと移動した時には夏冬の服装を同日に着る体験した。ガイドブックに東洋のスイスと紹介されるだけあって、面積も地形も非常に似ているが、スイスより標高差もあり、人口密度は5分の1である。このブータンは地形的には、北から西北部のヒマラヤ地域、中央部の丘や谷間の地域、そして南部の小高い丘や平原地帯の三つに区分される。人々の居住分布もまちまちで、首都ティンブーを中心にパロやブナカといった地区は、国の中心地だけあって人口も密集しているが、その他の地域では、山々の家が点在しているような形で人々は住んでいる。したがって、彼らの生活はまさに自然と共存した形の営みを見ているようである。

日本人でブータンの地を最初に訪れた人物は多

田等観といわれているが、彼は1913年にブータンを経由してチベットへ入ったとされている。ブータンを本格的に紹介した人物としては、大阪府立大学の助教授であった中尾佐助の名前が挙げられる。彼は1959年に、『秘境ブータン』という紀行文を著し、1965年には『ヒマラヤの王国ブータン』を発表している。また、1964年にはコロンボ計画の農業専門家として中尾佐助の弟子の西岡京治がブータンに派遣された。彼は長い期間、ブータンの農業開発に貢献したとして、1980年に「ダショー」（爵位）の称号を与えられている。1987年には日本の皇族として始めて浩宮皇太子殿下がブータンを訪問された。1988年から青年海外協力隊の派遣がスタートし、その後はJICAの専門家やシニアのボランティア隊員等も派遣されるようになってきた⁽⁷⁾。また、日本ブータン友好協会の会員など、知っている人たちの間ではブータン旅行も実施されており、ブータンを訪れる外国人観光客の間では日本人観光客の数がずっと上位を占めていた。

一般にブータンが注目されたものとして、テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」で取り上げられた番組がある。それは「夢の王国・ブータン——ツルを見守る人々——」をテーマとしたもので、オグロツルが飛来するフォブジカの村がオグロツル保全のために電線の取り付けをあきらめたという内容である。村人が利便性をあきらめ、ツルの保護を選択したというのが、当時、環境問題に関心の高かった日本人の心に大きくアピールした。また、GNH（国民総幸福量）の話はJICAの専門家や環境問題の研究者の間では前々から取り上げられており、ブータンは「21世紀の開発計画モデル」とか、「環境教育先進国」と称され話題となっていた⁽⁸⁾。さらに、熱狂的な日韓ワールドカップ開催の年に最下位チーム同士がブータンで試合をしたというニュースも世界に流れ、「The Other Final 2002」という映画にもなった。朝日新聞の「天声人語」でもGNHの理念が取り上げられ、サッカー選手だった中田英寿などの有名人の旅のドキュメンタリーも放映されるなどして、若者の間にもブータンの名が知られるように

なった。現在、ブータンを訪れる日本人には20代、30代の若い女性が多いという。

II. ブータンの観光政策の変遷

ブータンは1971年に国連のメンバーになるため、長い間伝統的に守り続けてきた鎖国政策を変更した。この頃に政府が望んだことは新しい教育と制限つきでの来訪者であった。ところが1972年にブータンの3代目国王が急死し、ジグメ・シンゲ・ワンチュク皇太子が弱冠16歳で第4代国王となり、その戴冠式が1974年に行われた。その際に外国から約20名の国賓を迎えることとなり、そのために宿泊施設を建設するとともに、道路も整備し、車両も用意した。この時にパロ、ティンプー、プツオリンに宿泊施設を作った。戴冠式終了後、これらの施設を有効活用するために始まったのがブータン観光の始まりである。この年にブータンを訪れた観光客数は287名だったが、その時のブータンの人々の心のもったもてなしに、旅行者がブータンを「シャングリラ（失われたこの世の楽園）」と呼んだのである。実際、ブータンも単なる観光客というより、「来賓」として観光客をもてなしたといわれ、観光客が特にこういった印象を持ったのも当然だった⁽⁹⁾。

また、1960年代、70年代と、ブータン政府は隣国のネパールで問題化していたヒッピーなどの観光客による風紀の乱れをおそれ、「割り当て」による観光客の制限を始めた。その結果、一年に200名とし、一グループ6人ないしそれ以上とした。また、一日130ドルとしたが、その当時においてはかなりの高額な数値であった。その当時のドルはまだまだ高い為替レートだったので、「世界最貧国への、世界で最も高い観光旅行」とも批判されたという。また、当時は空港がなかったために、観光客はインドからプンツリインの町の南国境から陸路で入ってきた。インドの北から入るには旅行者は特別な許可証が必要で、それを入手するにはデリーのインド大使館を通して6週間を必要とした。プナカ、ワンデュー・ポダンには1978年に入ることが許可され、1982年までには中央

ブータンのトレッキングが許可されるようになった。しかし、初期の頃ブータンを訪れる観光客というのは物好きな冒険家が訪ねる位だった⁽¹⁰⁾。

1983年2月にパロ空港が開設され、新しいドイツ製のドルニエ (Dornier) 228 というプロペラ機が導入され、パロとカルカッタを結ぶ便が飛ぶようになった。しかしまだ、小さな17人乗りの航空機で乗り心地も悪く、たびたび気象の関係でフライトが欠航となったり不定期だったため、人々は陸路でインドに出て、カルカッタやデリーから国際線に乗り継ぐ方法をとっていた。そこで、新しい航空機の導入を考え、1988年に小型ジェット機が購入された。1990年には滑走路も拡張され、72名乗りのボーイング146ジェット機 (BAe-146-100) が登場し、国際線として飛ぶようになった結果、ブータンの観光も新しい局面に入ってきた⁽¹¹⁾。

徐々に民間資本も入ってくるようになってきたが、1991年まではブータン政府直属の組織であった「ブータン観光公団」(Bhutan Tourism Corporation: BTC) が所管であった。したがって、外国人観光客は「ツーリスト」というより、国の「ゲスト」として扱われた。1991年の10月に観光が民営化されると、多くの旅行会社が作られるようになったが、その多くは解散された観光公団の元職員によるものであった。観光会社は政府の公定料金に準じてツアーを実施するが、基本的には独立した利益を追求する組織として動くことが出来た。また同年、政府機関として貿易及び産業省にブータン観光庁 (Tourism Authority of Bhutan: TAB) が設立され、1998年には政府観光局 (Dept. of Tourism Bhutan: DOT) となった。また、2008年にはブータン観光審議会 (Tourism Council of Bhutan: TCB) となり現在に至っている⁽¹²⁾。

1991年にTABによって設けられたピークシーズンの公定料金制度は一日一人200ドルでシーズンオフ (閑散期) は165ドルである。そのうち35%にあたる70ドルもしくは57.75ドルが政府によって徴収される。また、インド人もしくは非公式の旅行者をのぞく残りの外国人観光客は、ブー

タン政府に登録された60の観光業者を通して予約を入れるが、直接でも又、自国の旅行代理店を通してでも良い。また、すべての観光客は政府認可のホテル、ゲストハウス、ロッジ等に宿泊をする。すべてのガイドは英語を話すことが出来、観光客をパロ空港で出迎え、ブータンを離れるまでずっとアテンドする。バス会社は車両の手配及び食事の手配をする。また、トレッキングをする観光客にはトレッキングガイドがつき、トレッキンググループを案内する⁽¹³⁾。

III. 日本人をひきつける観光の魅力とは

1. タイムトラベル：日本の過去がある国

ブータンには失われつつある日本を見つけることが出来る。かつて、日本の国立公園協会にブータンのジグメ・ドルジ国立公園の支援活動を頼んできた国連ボランティア職員であった有原元博氏がブータンを紹介する時に、「ブータンは江戸時代、ネパールは明治時代と思ったらわかりやすいでしょう」といていたが、まさに幕末の日本にタイムスリップしたような錯覚を覚える体験ができる国なのである。丁度、リンカン・ステフェンズが1917年に初めて日本に立ち寄った時に、「……見事な稲田、そのはるか背景の連山、よく絵に描かれた光景だ。そして東京について、私は再び beauty と風流を目撃した。日本は “a thing of beauty” なのだ。私は、どの文明国、あるいはいかなる文明も、日本ほどに Lovely であるとは想像し得なかった。……現在の日本のあり方こそが、国民生活の全細部をその国の文化と調和させることに成功した場合の文明国の範例にほかならぬ⁽¹⁴⁾、と感じた同じ心境を、ブータンのパロ空港に降り立った日本人観光客は感じるのである。空港では日本の着物に似たゴ (Khos) やキラ (Kiras) の民族衣装を身にまとったガイドらが迎えてくれる。町行く人々も民族衣装を着こなし、野良で仕事をする人たちも今だ懐かしい農具を使い、農家も町並みも伝統的な建築で建てられている。日本の「伝統的建造物群」⁽¹⁵⁾ が国全体のスケールで存在するかのようである。中尾佐助が照葉樹

林文化論を提唱したときに、その文化をヒマラヤの南面の中腹から、シナ南部、日本本州南半部にわたる地域を一つのユニットとしてとらえ、ブータンも日本も同じ照葉樹林農耕文化に位置づけたように、ブータンには文化的要素からみても日本との共通点がとても多い⁽¹⁶⁾。また、日本に馴染みの植物もたくさんあり、特にエトメトと呼ばれるシャクナゲの花の咲く季節にブータンを訪れると、すばらしい景観を楽しむことが出来る。こういった日本のなつかしき原風景を直接目に触れ、体験できる、そんな国がブータンであり、それが日本人にとって強烈なノスタルジアを呼び起こすのである。多田道太郎や安田武は日本人には「滅びの美学」があり、滅びていくものへの強い郷愁の感覚があるとしているが⁽¹⁷⁾、まさに滅びてしまった古きよき日本社会へと観光客は自分をタイムスリップできるのである。

2. 閑のあるライフスタイル

ブータンを訪れるとまず感じるのは時間の流れの緩やかなことだ。一日が同じ24時間であるのになんと人々は穏やかに生活をしているのだろう。日本でのあわただしい生活のリズムが信じられない。2000年の調査の時に、東西を走る主要道路で木材の運搬をしていた時には30分以上、その作業が終わるまで我々の車は待っていたし、牛を何頭かひいている老人が前を歩いている時も車はずっと通り過ぎるのを待っていた。車で移動している時に歩いている人たちを良く見かけるが、彼らは一日20キロも30キロも歩いて目的地に向かうという。日本なら車で用をたすような距離である。また、我々の旅行を手配してくれた旅行代理店のオーナーは一年に働く日数は2ヶ月あまりだという。その他は地元の少年サッカーチームの面倒を見たり、友人たちとアーチェリーやバスケットボールなどを楽しんだり、王立ブータン自然保護協会の広報活動をボランティアで手伝っているという。信じられない勤務時間ではないか。1980年代のブータン政府の勤務時間は月曜日から金曜日までが朝8時から午後2時までで、土曜日は12時までだったという⁽¹⁸⁾。労働時間も通勤時間

も長い日本人にとって想像しがたい勤務スタイルである。自由時間のたっぷりあるブータン人の生活と比較すると、物的豊かさとはひきかえにゆとりをなくしている日本人の生活が果たして本当に幸せなのだろうかという疑問が沸いてくる。

3. 自然の豊かさ：国全体が国立公園

ブータンの最初の現地調査を実施した2000年(平成12年)2月の出発前に、青年海外協力隊でブータンに行っておられたカリタス女子短期大学の石田孝夫先生に「ブータンは国中が国立公園のようなものですよ」と言われ、にわかには信じがたい気持ちで出かけたが、パロ空港に降り立った瞬間に、その意味が理解できた。まさに国中が国立公園といえるほどの美しい自然景観が目の前に広がっていた。

ブータンは国土の72.47%が森林で、その他、農地が7.71%、牧草地が3.9%、居住地が0.08%、園芸地が0.14%、その他が16.7%である⁽¹⁹⁾。園芸地とは主としてりんごや柑橘類の果樹栽培で、その他とあるのは万年雪・氷河や湖沼面積である。ブータンは「森林及び自然環境保全法」で、国の6割を森林として保護することが定められているが、すでに72.5%を森林として確保しており、ネパールの森林面積が10%をきる中で、これだけの森林面積を維持していることはすごいことである。その結果、ブータンはその生物の多様性とその植生存在によって、「世界の4大ホットスポット」と称されるほどである。また、国際自然保護連合(IUCN)が、国土の10%を保護地域として指定することを各国に促している中、ブータンではすでに26%を保護地域として指定しており、さらには、これらの保護地域を結ぶ「緑の回廊構想」(グリーンコリドア構想)も実施に移している。したがって、一日車を走らせても、決して途切れることのない森林回廊が続き、人間が深い緑に吸い込まれていきそうな自然の奥深さを感じるのである。澄み切った新鮮な空気、谷沿いを流れる豊かな水量とその透明さに、国全体にしめなわがかかったような霊気漂う国がブータンなのである。照葉樹林は憂鬱で悲しげな幽玄さがあり、そ

の山腹に点在する伝統的な仏教寺院や谷あいや川沿いに立てられたゾン (Dzong) と呼ばれる王城の荘厳さによって一層その風景の美しさが際立つ。

4. 宗教心

ブータンはチベット仏教のカギュ派とニンマ派が浸透しているとされているが、ブータン国内で多くの僧を見かける。成人した僧だけでなく、幼稚園児のような幼い子供や若い僧たちが、厳寒の下、僧院で修行しているが、その生活は大変質素である。ブータンでは一家に一人子供を僧にするといわれる程、宗教心の厚い国である。また、町や道路沿いの見晴らしの良い場所には経文が書かれたダルシンの色とりどりの旗が風にはためき、ゾンや寺院の参拝者は朝に夕にマニ車を回しながら祈りを続ける。またチョルテンと呼ばれる仏塔もあちらこちらで見られ、まさに国中に宗教的雰囲気漂うのである。本当に信仰している人々の姿は、宗教心が希薄となった日本人の胸を打つものがある。

ブータンには世界遺産に指定できるような素晴らしい寺院、仏像、仏画の遺産があるが、まだ、一つも指定されていない。それに関して観光局長に尋ねたところ、ブータン人は「ものにとらわれない、ものはやがて朽ちるのが倣い」という考えがあり、あまり後世まで残そうという気持ちがない。また、「ブータン人が寺院に行くのは寺院の価値を見学に行くのではなく、寺院に『拜む』ために行くのである」と答えたが、確かに我々が寺院やチョルテンを見学する際に、厳寒の真冬でもガイドはダウンジャケットを脱ぎ、「カムニ」と呼ばれる白い布を肩にかけ、正装して案内をしていた。また、寺院に足を踏み入れる際にどちらの足を先にいれるかとか、どちらの方向で寺院を見て回るか等、細かい説明をしてくれ、非常に精神面での学ぶべきものが多い。一度、道中で次の町まで若いブータンの女性を乗せてあげた時には、町に着くまでその女性はずっとお経を唱え続けたのにはびっくりしたが、ガイドによると車の安全をお祈りしていたのだという。地方行政を司

る場と寺院が同じ「ゾン」の建物に入っているというだけでも、この国が宗教といかに強い結びつきをもっているかがわかる。

5. 中庸の思想

ブータンにおける開発理念とは「仏教哲学にある中庸の精神を機軸に『モノと心』の調和を保ちながら、ソフトランディングしつつ、緩やかに勝つ確実に前進しつつある」というもので、伝統文化と自然環境の保全に対してすばらしい実績を上げている。

1998年に発表されたブータンの国家環境保全戦略のタイトルも、「中庸 (The Middle Path) : ブータンの国家環境保全戦略」と名づけられ、文化遺産、伝統的な価値観、自然を保護しながら開発をしていくという基本理念が示されており、こういった戦略にかなう開発のみを許可すると述べられている⁽²⁰⁾。また、自国の伝統と文化を守るため、厳しい民族衣装の着用を義務付け、伝統建築の保存にも力を入れ、厳しい建築規制を実施している。また、自然環境を守るため、むやみと建築物を建てることを控え、そのための不便やむなしという考えを持っている。

ブータンの旅で困ることの一つに施設の不備が挙げられる。宿泊施設での停電や熱いお湯がでてこなかったり、トイレが使えなかったりする。中でも移動におけるトイレ問題は大きい。2000年の現地調査の際もジャカルからティンブーまでの12時間の旅でトイレストップは唯一昼食を取ったレストランでのみだった。しかし、当時の観光局長は「こういう不便な場所でも、この国の文化と自然に魅力を感じてくださる方々を我々は歓迎するのです」といい、当分トイレを整備する計画はないと言った。その理由は、「トイレの建物は周辺の景観を破壊する要素ともなるし、実際にトイレを建設してもその管理が行き届かなければ、かえって汚くなって使えなくなります。何より、糞尿は自然の中で分解されるので、その方が自然環境の保全につながります」と答えた。また、王族の方々が地方に行かれる時には移動トイレを用意するという事だった⁽²¹⁾。そして8年たった

2008年に出かけた時も、まだトイレの整備はされていなかったのである。

また、フォブジカではオグロツルの保護のため、電気がなく、暖を取るのにストーブの上においた焼き石を部屋に戻る時に配られたり、お湯枕が配られたりと、地域の人と同じ暖をとる体験をした。観光局長はこういった状況に対し、「利便性を望む観光客はそういった国に行かれればよいのです。ブータンの国のこういった不便さを承知で訪れる観光客こそ、我々が歓迎すべき観光客なのです」と言い切った⁽²²⁾。こういった中庸の思想に基づき、過度の開発を警戒し、「不便さ」さえも観光の特色としてしまう、逆転の発想は、日本人の貧しい中での「我慢」、「忍耐」といった昔の価値観を思い起こさせ、懐かしい日本人の姿を思い起こさせるのである。

6. 清貧の思想

中野重治の『清貧の思想』が日本でベストセラーとなったのは1992年の秋である⁽²³⁾。日本ではバブル経済が崩壊し、人々の幸せや生き方が見直され始めた時期にあたる。人々は経済力にものを言わせ、欲望のおもむくままに物質的な豊かさばかりを追い求め、物を買えば大量消費の生活が決して人々を幸せにはしてくれなかったことを悟り始めた時期でもある。

ブータンはアジアの貧困国でありながら、貧しさを感じない。現金がなくとも農業による自給自足をしている人が多いからか貧しさを感じないのである。また、ブータンの観光の基本姿勢は「武士は食わねど高楊枝」で、観光客のためにへつらうことをしない。ありのままのブータンの良さをみて欲しいというスタンスなのである。また、地方を回っても物乞いをしたり、観光客をつまわして物を売るような観光シーンは見られない。観光客からなにかをねだるといった場面に出くわすことがない。与えられた環境の中でつつましくかに生活する人々の姿を目にするのである。だが、こういった簡素な暮らしは庶民だけではない。ブータンの前国王の『スティックなまでに質素なライフスタイル』⁽²⁴⁾にも驚くべきものがあり、国民の

尊敬はおろか、国王のライフスタイル自体が日本人観光客を魅了するものである。

ブータンは2006年に絶対王政から立憲民主国に移行し、第4代国王ジクメ・シンゲ・ワンチュク国王が退位し、2008年11月に第5代国王ジクメ・ケサル・ナムウゲル・ワンチュク皇太子が即位した。しかし、前国王はGNHの理念を提唱したことで知られるように、非常に文化と自然保護に関する思いも深く、国王自身が『清貧の思想』を実践されている方なのである。国王の住まいもサムテンリン・パレスと呼ばれる質素なログキャビンで、車もトヨタのランドクルーザーであるという。また、1989年2月の大喪の礼、1990年11月の即位の礼のために来日された時にもブータンの民族衣装で出席し、話題となった。

また、各国途上国元首がODAの増額援助要請をする中で、そういうお話を一切なさらなかったという話が残されている。さらに、インドのアッサムの分離派独立運動で、インド人ゲリラ武装の少数民族がブータン領内でトラブルを起こした際にも話し合いで決着が付かなかったために、軍事的手段により国外退去をさせることになった。その時に国の独立・安全の保守派国王の任務であるとして、国王自らが王子を伴い、戦いの陣頭指揮をしたことも人々を驚かせた⁽²⁵⁾。こうした国王の人柄と信念は国内外の人々から大きな尊敬を集めるものとなっている。

7. 忠義心

ブータン観光を最大限に演出するものとして、パロ空港で観光客を出迎えてくれるガイドがある。空港に着いた瞬間から「ゴ」や「キラ」の民族衣装を身にまとったガイドがにこやかに出迎えてくれ、ブータン観光がスタートする。パリッとのおりとアイロンのきいたテュゴの襦袢の袖と襟の白さと、正装の際に用いられるショールのような「白いカムニ」をまとった姿はさしずめ、封建社会における忠誠を誓った臣下を思わせる。この専門ガイドはブータン滞在中、すべての世話をしてくれ、観光地への案内、解説の他にも、買い物、食事、病気の世話等、あらゆることをお願いできる頼も

しいツアーエスコートでもある。ホテルに戻り、自分の部屋に入るまで、気配りと心配りで接客をしてくれる彼らの姿は、まさに観光客を案内するというより、「ゲストをもてなす」親切の極意を感じさせてくれるものである。こういった日本人の心をくすぐる忠義心と忠誠心のサービスを提供してくれるブータンの専門ガイドもブータン観光の特色のひとつである。

IV. ブータンの観光の魅力を支える メカニズム

ブータンのこういった観光の魅力を制度の面から分析してみよう。

1. ブータンのブランド力

「ブランド」を著した石井淳蔵は「ブランドとは、九鬼周造のいう『日本の粹』や山本七平のいう『場の空気』の概念に似て、客観的なものとして存在するというよりも、その存在を了解しあうようなたぐいの存在のようにも思える」⁽²⁶⁾と述べているが、ブータンもはっきりと定義ができないまでも、観光客の間でなんとなく了解しあっているブータンのイメージがあり、それがブータンのブランドとなっている。

実際に、日本においてブータンを紹介する際に使われている言葉として、「秘境ブータン」「ヒマラヤの仏教王国」、「雷龍王国ブータン」、「神秘的王国」、「最後のジャングリラ」、「桃源郷ブータン」といった文字が並ぶ。また、ブータンのツアーオペレーターがウェブサイトで紹介しているブータンのイメージには「珍しい」、「文化的な」、「伝統的」、「仏教的」、「神秘的」、「平和的」、「山々の」、「自然美あふれる」、「エキゾチックな」といった形容詞が用いられ、また、ホームページの旅行案内には、「ジャングリラ」、「パラダイス」、「悠久の」、「不思議な」、「荘厳な」、「そこなわれない」、「環境のホットスポット」、「原始の」、「手つかずの」、「ユニーク」、「排他的な」といった言葉が盛んに使われている。

そして、これらのイメージを作り上げている要

素の一つが、地理、地形的といった物理的要因によるものだけではなく、「公定料金制度」による高い値段の設定なのである。この公定料金制度は観光客数を制限する意図で始められたものではないと、観光局長は述べていたが、実質的に、他のアジアの発展途上国ならば、一週間近い滞在ができるような値段を一日の滞在料金と設定することで、それだけの経済力のない観光客を締め出し、結果として「制限ツーリズム」となり、「ブータンの特殊性」を演出しているのである。「制限する」とは、限界を定め、線引きをするもので、この意味するものは「排他性」である。また、こういったユニークな制度は「高級感」と同時に「稀少価値」をも演出しているのである。そういった「高級感」と「稀少価値」を持つ国に訪れることができる観光客は言うまでもなく「優越感」と「特権意識」をも味わうことが出来るのである。この一日200ドルを払わなければならないという公定料金制度が、この額と比例して良質の観光客を呼び込むとは限らないが、少なくとも、麻薬を持ち込んだり、無賃で旅をしようとする安易なヒッチハイカーやヒッピーといった、ブータンの文化や風紀を乱すものの入国を抑える効果はあるといい、実際にブータンを訪れる観光客は比較的高い年齢で高学歴、高収入の観光客という統計がでている。この公定料金は来年度からさらにオンシーズンが250ドルで、オフシーズンが200ドルの値上がりとなるという⁽²⁷⁾。

2. 旅の「アラカルト」

ブータンでは一日一人200ドルを払えば宿泊、食事、車、運転手、専門ガイドがつく。したがって、いったん入国すれば、すべての面倒をみてもらえるという安心さがある。

この公定料金制度における最も魅力的な点は、観光サービスの尺度がかならずしも金額と比例していないという「意外性」ではないだろうか。すなわち、観光客は豪華なホテルに宿泊しようとゲストハウスや農家に宿泊しても一日200ドルという値段設定である。また、車両の利用距離に係わらずやはり一律の料金であることは、日本や海外

を旅行する時に当たり前となっている宿泊施設のグレードアップに対する追加料金や、オプションツアーに対するエクストラ料金がここではないのである。こういった文化、歴史的な観光、国立公園や自然地域のトレッキングなど、ツアーの内容、場所、利用距離などに係わらず、すべてが一律の料金制度というのは、より良いサービス、より多い観光メニュー、より多くの移動距離程多く支払うという旅行費用の常識を覆すものがある。いってみれば、ブータンの観光というのは、「旅のアラカルト」ともいうべきもので、「定められた料金さえ払えば、限りなく好きな旅を好きな日程で好きなだけ満喫できる」自分だけの一品の旅なのである。

3. ブータンの観光の流儀

ブータンの観光政策の一つに『本物志向』というのがあり、ブータンの祭事などは観光客のために見せることを前提としては行われない⁽²⁸⁾。祭事の中心はあくまで地元住民であり、そういった場を見ることが出来る観光客は運が良いという考えである。すなわち、観光客のために便宜を図ったり、観光客のための特別なパフォーマンスはしないということである。また、観光客にとって最も魅力的な寺院へも厳しい立ち入りを制限しており、宗教を観光資源にはしないという原則を成り立たせている。しかし、宗教的儀式を見学したり、瞑想に参加したりといった精神的体験はブータン人同様、外国人観光客もやらせてもらえるのである。これらは伝統文化とブータン人の宗教心、自国民の利益を優先させる姿勢を貫くもので、観光収入のための過剰なサービスはしないことの原則を示している。この観光客に媚びない姿勢もまた、観光のサービスの本質をつくもので、「本物を見せる」という自信とプライドは、日時や内容を観光客の便宜のために変更するといったことをせず、その姿勢は、偽りを嫌う日本人の武士道にも通ずるものがある。日本の観光地は商魂たくましく、年中、金太郎飴的な観光ハイライトを提供したり、サービス過剰の結果、行事の時期に関係なく疑似体験が出来るようなパフォーマンスを用意するこ

とで、逆にその地域の「本物性」を弱めてしまうケースも見受けられる。

4. 環境保全

ブータンのガイドに、夏の旅行は虫が多いが、殺虫剤を使って殺すのではなく、追い払うので気をつけるようにと言われたが、宗教心の深い国民なので、殺生を嫌い、むやみに生き物を殺さないということなのであろう。また、ブータンは1999年に第4代国王が「プラスチック使用の禁止」を宣言し、その国王の在位25周年にあわせて、プラスチック袋などの使用・販売を法律で禁止することになった。また、世界で唯一の禁煙国としても知られ、2004年12月17日のナショナルデーより、国内でのタバコの販売を全面的に禁止することが決定された。さらに、環境教育をブータンの三大政策の一つと位置づけ力を入れている。国全体が国立公園のように自然豊かな国でありながら、さらなる環境保全に力を注ぐブータンは21世紀の環境モデルとも称され、環境保全に関心の高い観光客にはたまらない魅力を提供している。また、開発援助を拒む国としても知られ、他の開発途上国が援助の拡大を叫ぶ中で、ブータンはいずれの時点で先進国からの援助を打ち切り、ブータン自身が自立することを20数年前からの各開発計画の冒頭に必ず記しているほどである。これは、開発援助による自然破壊や伝統文化の破壊をおそれているもので、隣国のネパールを反面教師としている。また、援助国を慎重に選択し、北欧の福祉国家やスイス、ドイツ、オランダ、日本といった国を選択している⁽²⁹⁾。

V. ブータンの観光政策の転換

初期の頃のブータンの観光政策は「制限ツーリズム」と呼ばれるもので、「High Value, Low Volume」を政策の基本として動いてきた。しかし、このコンセプトには物理的な要因による理由が大きく、輸送機の定員の問題と宿泊設備の不足が大きく影響していた。1983年から88年にかけてはたった17人しか運べない小型のプロペラ機

だったし、1988年には72人乗りのジェット機が導入され、運行路線が拡大することで、乗客数は大幅に伸びたが、ピークシーズンに集中する観光客を運ぶには足りない座席数であった。それでも1990年から96年の7年間に約16,000人から約27,000人にも増えたのである。さらに2004年にはエアバスが二機導入され、年間6万から7万人の乗客を運べるようになった。このエアバスは114座席あり、50%以上の収容力アップとなり、観光客の増加受け入れも可能となったのである⁽³⁰⁾。

また、ブータンはホテル数が十分ではなかった。ブータンのホテルは伝統的なブータン建築を基調とする設計で、先進国にあるようなマストゥリズムに対応できる多くの客室をもったホテルがなかった。ブータンに観光客が最も多く来る時期は3月、4月、10月、11月である。それは季節が一番良いのと、宗教や文化的行事がこの時期にあるからである。1、2月、及び6、7月は寒いし、トレッキングをするにも雨が多くツアーに向かないのである。したがって、ピークシーズンで最も頭を悩ますのが宿泊施設の確保であり、場合によってはテントに宿泊する観光客も出ており、これはサービスの低下を招くものであった。

さらに、ツーリストが主として訪れる観光地が集中しており、パロ、ティンプー、プナカ、ワンディボダン、トンサ、ブムタンぐらいで、最近はこれらの地域にオグロツルの越冬地で知られるフォブジカが加わるようになったが中央帯に固まっている。また、サービスの施設整備という点からもグローバルスタンダードからは程遠い状態であった。冷蔵庫があるホテルも数少なく、お湯や暖房が効かないなどの問題が起こるホテルは少なくない。また、ホテルの従業員もきちんとした接客サービスの訓練を受けておらず、いろいろとトラブルが起きる場合もあった。そういった宿泊施設数の不足や施設整備の不備、マンパワーの不足、サービス技術の未熟さといった問題から、ブータン政府としては受け入れる数に慎重にならざるを得なかったというのが本音であった。しかし、前述したように、外国人観光客はこういった高い公定料金や不便さを逆に魅力ある国としてとらえ、観光

客の数は年々伸びてきたのだった。そこで、ブータン政府は、今までの観光の基本理念としていた「High Value, Low Volume」から、「High Value, Low Negative Impact」という原則に切り替えたのである。これは「人数制限を撤廃するが、環境や文化へのインパクトは出来るだけ抑える観光に切り替える」というものである。そして、ブータン観光政策の10年計画の目標として掲げたのが、①責任ある観光、②独自性を保つ、③本物志向、④高い質、であった。これを原則としつつ、10万人の観光客数の受け入れを目標とし、観光による雇用を今までの5%増加させる計画を立てている。そして、その戦略として、以下のような対策と推進策を検討している。

1. 公定料金の維持
2. 質の維持とその監視、モニタリング
3. 観光製品の多様化
4. 宿泊施設の整備
5. ガイドサービスの充実
6. ネーチャーツーリズム、エコツーリズム、ローカルツーリズムによる観光の推進
7. マーケティングの改善
8. インフラの整備
9. 観光ゾーニングと観光資源の掘り起こし
10. 税の優遇措置
11. ゴミ問題の改善

また、先進国では当たり前利用されているクレジットカードやATM機の導入、公衆トイレの増設、道路・交通の改善、インターネット施設の整備、ホテルの施設をグローバルスタンダードに引き上げる、レストランや食事のバリエーションを増やす、野犬の始末、みやげ屋、ギフトショップの数を増やすといった改善策も検討している⁽³¹⁾。

VI. おわりに：観光のパラドックス

電線の代わりにソーラーを、電話線の代わりに携帯を、投票箱の代わりにいきなり電子投票を、と、よその途上国での発展プロセスを歩むことなくいきなり近代化したブータンにとって近年の国の発展の仕方は目覚ましいものがある。はたして、

「最後のシャングリラ」といわれたブータンがその稀少価値を保ったまま、観光客を集め続けられるのだろうか？

人は当たり前のことを当たり前でない方法でやることによって注意をひきつけるもので、そういう点からすると、ブータンという国は、「世界の常識を裏切った国」である。低所得国でありながら、援助を断り、自立を目指している国、法外な観光料金を徴収する国、開発よりも保全を優先する国、利便性より環境保全を優先するといった、モノとお金の量に豊かさの指標を掲げてきた日本人にとっては常識を破る発想を実践している国である。しかも、働き続け、ゆとりを失い、大量消費社会を形成した結果、自然環境を破壊し、人間の生き方の根本まで見つめなおさざるを得なくなった日本人にとって、GNHを国の理念と定め、「本当の豊かさとは何か？」を教えてくれるブータンへの観光は心が洗われる旅でもある。

しかし、観光客の拡大路線へと転じたブータンは、多くの観光客を迎え入れるための観光の整備を進めはじめた。ホテルの建設にしても外国資本を条件付ではあるが許可し、外国資本による豪華なホテルが次々に建設され始めた。2004年にオープンしたホテル・アマン・コラやウマなどは一泊1,000ドル以上の超高級リゾートホテルである。こういった超高級ホテルのサービスはあまりに心地よすぎて、せっかくブータンを訪れても、滞在客はホテルの外に出たくなくなるほど快適であるという。こういった外資系のサービスは快適なグローバルスタンダードのホテル施設とサービスを提供するものではあるが、一方では、日本人がもっとも懐かしんだノスタルジックな環境をも葬り去ることとなり、本来のブータンの魅力としてきた「過去への郷愁」に浸れなくなってしまうマイナス面を持ち込んでしまうようになってきている。

また、日本人にとって、ブータンとは自然の美しさだけではなく、国王の清貧の思想、ブータン人の生き方の流儀に武士道の精神や日本人が失ってしまった自然観を見出し感動するのである。つつまじやかに、しかし誇りと自信を持って、決して観光客に媚びることなく、マイペースで観光客

を受け入れてきたブータンの「制限ツーリズム」はそれ自体が日本人にとって観光の最大の魅力となっていたのである。しかし近代化の波がおしよせてきたブータンの変化が影響してかどうかかわからないが、ここ10年間の日本人観光客数の伸び率はトップ先進国中で一番低い。アメリカやイギリスといった欧米の国々の観光客数が伸びている。

無論、観光収入の増大による国の経済の発展は国民の福祉へとつながり、それこそがブータンの国民に対するGNHの幸福度を高める要素となるものであるが、同時に観光客受け入れのための観光施設の充実、受け入れ人数の拡大といった利便性の追及、快適で効率的な観光サービスの充実は、それこそ、先進国の観光体験と変わらないものになってしまう。

このように行きやすさが増せば増すほど、観光客の受け入れ人数を増やせば増やす程、ブータンの稀少価値は薄れ、ブランド力も低下してしまうのである。そういう意味で一見、「公定料金制度」と「GNH」はブータン観光の二大観光資源といわれてきたが、その二つの基本理念は観光客の数を「制限する」と「増やす」という相反する面を併せ持つキャッチコピーだったのである。ブータン審議会は今後の「観光10年計画」において観光客数を10万人にすることで、ブータンのGNHを実現すると述べているが、こういったブータンの近代化と観光客の増加による混雑は観光の価値を減少させるものである。

先進国の人間にとって、「制限ツーリズム」による人数制限や、「GNHを国の発展の指標」にするという概念は同一線上にあり、ともに『抑制する』ことをキーワードとしてとらえ、それがロハスやスローライフといった新しいライフスタイルと重なり注目されたのであった。しかし、ブータン政府にとってはGNHとは行過ぎることのない経済発展によって国民の貧困をなくし、国民を幸せにすることを目標とする概念であって、この観光拡大政策はその指標と矛盾するものではないのである。確かに観光収容力からみて、九州より広い面積にわずかに64,5万人しか人が住んでいない国であれば、1万人の観光客が10倍に増えた

ところで、まだまだ受け入れる余地はあるだろう。しかし、民族衣装を着て慎ましやかに生活するブータン人が10万人増えるのと先進国の観光客10万人が旅の途中ですれちがうというのは明らかにブータンの印象は異なってくるのである。

特に日本人が過去に持っていた「美意識や暮らしの流儀」をブータンの国に見出せると感じる日本人観光客にとって、ブータンへの旅は、過去の郷愁を呼び起こすフォークツーリズム（民俗観光）なのである。ブータンが現に貧困国であり、国民が幸せになるためには、さらなる経済発展と近代化が必要であるという現実はできればみたくないものである。こういった現実を見据えず、ブータンに「ノスタルジックな日本」の幻想を抱き続けるとブータンへの旅は失望に変わる。

世界の「最後の理想郷」として存在していたブータンが、発展と制限の二面性のバランスをどのように舵取りしていくかが今後の鍵となろう。そして、今後、そういった部分での大きな役割を果たすのが、まだ手付かずで残されているブータンの国立公園の利用ではないだろうか。ブータンには現在9ヶ所の保護地域があり、そのうちの4ヶ所が国立公園として指定されている。ブータンの保護地域には魅力あるトレッキングルートがたくさんあるが、まだまだトレッキングに参加をする観光客は歴史・文化遺産を見学に来る観光客に比べてその数は極めて少ない。ブータンの国立公園は日本同様、公園内にも人々が生活を営んでおり、四季の美しさのある国立公園や保護地域はシーズンオフでも見るべき観光資源を有している。ブータン政府もエコツーリズムの重要な役割を認識し、今後の力を入れていく観光政策の目玉として、このエコツーリズムには特別な思いをもっているようだ。

また、ほぼ10倍に増える観光客をむかえるにあたって慎重に外国資本や民間の資本導入も検討している。こういったブータン政府の観光政策転換の流れが、今後のブータンにどのような変化と影響を与えるかは未知数ではあるが、ブータンの観光の健全な発展を見守ることが出来れば幸いである。

《注》

- (1) Dept. of Tourism, Ministry of Economic Affairs, *International Tourism Monitor: Annual Report-2007*, 2008, p. 19.
- (2) 第3代国王の死去後、1976年12月、スリランカの首都コロンボで開催された第5回非同盟諸国の首脳会議の際、即位間もなかった前4代国王は記者会見席上で記者団に初めてGNHの有名な語録を残したとされている。
小松征司「ブータンの現況報告とGNHについて」、『ブータン』No. 68, 2000, pp. 401-402.
- (3) テレビ朝日, “素敵な宇宙船地球号”, 2000年4月2日, “夢の王国・ブータン——ツルを見守る人々——”。
- (4) Royal Government of Bhutan, National Environmental Commission, *The Middle Path: National Environmental Strategy for Bhutan*, 1988, pp. 51-53.
- (5) Lhatu Wangchuk, “Tourism will not change: Bhutan’s Unique Culture,” *Tashi Delek*, July-Aug. 2008, p. 42.
Stan Armington, ed., *Lonely planet: Bhutan* (Australia: Lonely Planet Publications, 1988), pp. 31-31.
- (6) Stan Armington, ed., *Lonely Planet: Bhutan* (Australia: Lonely Planet Publications, 1988), pp. 30-31.
- (7) 今枝由郎『ブータン：変貌するヒマラヤの仏教王国』, 大東出版社, 1944, p. 1.
- (8) 小松征司「ヒマラヤ山系の小国、ブータン王国の開発ビジョンはなんとも刺激的」『クロスワード6』, 国際協力事業団, 1999, pp. 46-51.
- (9) Sandra Brunet *et al.*, “Tourism Development in Bhutan: Tensions between Tradition and Modernity,” *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 9, No. 3, 2001, pp. 243-263.
- (10) *Ibid.*
- (11) Sonam Tshering, “Getting off the Ground,” *Tashi Delek*, July-Aug. 2008, pp. 56-58.
- (12) Royal Government of Bhutan, Tourism Council of Bhutan, *Tourism in the Land of the Thunder Dragon — A Primer* (<http://www.tourism.gov.bt> 2008.9取得), pp. 1-2.
- (13) Interview with Thuji Dorji Nadik, Tourism Council of Bhutan, Thimphu, Bhutan, Sept. 2008.
- (14) Lincoln Steffens, *The Autobiography of Lincoln Steffens*, pp. 768-769. as quoted in 都留重人, 『21世紀日本への期待』岩波書店, 2001, p. 3.
- (15) 「伝統的建造物群」とは「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」を保護する目的で、1975

- 年(昭和50年)7月1日に文化財保護法の一部を改正し、伝統的建造物群保存地区制度として日本で創設された。
- (16) 上山春平編『照葉樹林文化：日本文化の深層』, 中公新書, 1969年, pp.13-19.
- (17) 多田道太郎, 安田武「日本の美学と世界文化・対談」梅棹忠夫, 多田道太郎編『日本文化と世界』, 講談社, 1972, pp.31-33.
- (18) 今枝由郎『ブータンに魅せられて』, 岩波書店, 2008年, p.89.
- (19) JICA ブータン事務所青年海外協力隊環境部会『国別環境情報整備調査報告書(ブータン王国)』, 2003年, p.64.
- (20) Royal Government of Bhutan, National Environmental Commission, *The Middle Path: National Environmental Strategy for Bhutan*, 1988, pp.51-53.
- (21) Interview with Yonten Tshering, Dept. of Tourism Bhutan, Thimphu, Bhutan, Feb. 2000.
- (22) *Ibid.*
- (23) 中野孝次『清貧の思想』, 草思社, 1992年。
- (24) 今枝, 『ブータンに見せられて』, p.110.
- (25) *Ibid.*
- (26) 石井淳蔵『ブランド：価値の創造』, 岩波書店, 1999年, p.8.
- (27) Dept. of Tourism, *op. cit.*, pp.48-51.
- (28) Thuji Dorji Nadik, *loc. cit.*
- (29) Royal Government of Bhutan, Planning Commission Secretariat, *Bhutan 2020: A Vision for Peace, Prosperity, Happiness*, 1999, pp.15-25.
- (30) Sonam Tshering, *loc. cit.*
- (31) Dept. of Tourism, pp.16-21.
- 2) Brunet, Sandra et al. "Tourism Development in Bhutan: Tensions between Tradition and Modernity," *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 9, No. 3, 2001
- 3) 今枝由郎『ブータン：変貌するヒマラヤの仏教王国』, 大東出版社, 1994年
- 4) 今枝由郎『ブータンに魅せられて』, 岩波書店, 2008年
- 5) JICA ブータン事務所青年海外協力隊環境部会『国別環境情報整備調査報告書(ブータン王国)』, 2003年
- 6) 小松征司「ヒマラヤ山系の小国, ブータン王国の開発ビジョンはなんとも刺激的」『クロスワード6』, 国際協力事業団, 1999年
- 7) Royal Government of Bhutan, National Environmental Commission, *The Middle Path: National Environmental Strategy for Bhutan*, 1988
- 8) Royal Government of Bhutan, Planning Commission Secretariat, *Bhutan 2020: A Vision for Peace, Prosperity, Happiness*, 1999
- 9) Royal Government of Bhutan, Ministry of Economic Affairs, Dept. of Tourism, *International tourism Monitor: Annual Report-2007*, 2008
- 10) Royal Government of Bhutan, *Tourism Council of Bhutan, Tourism in the Land of the Thunder Dragon — A Primer* (<http://www.tourism.gov.bt>)
- 11) Tshering, Sonam, "Getting off the Ground," *Tashi Delek*, July-Aug., 2008
- 12) 都留重人『21世紀日本への期待』, 岩波書店, 2001年
- 13) Wangchuk, Lhatu, "Tourism will not change: Bhutan's Unique Culture," *Tashi Delek*, July-Aug., 2008
- 14) 山本けいこ『雷龍王国への扉：ブータン』, 明石書店, 2001年

参考文献

- 1) Armington, Stan, *Lonely Planet: Bhutan*, Australia: Lonely Planet Publications, 1988



写真1 自然とブータンの伝統建築が迎えてくれる
パロ国際空港



写真4 「カムニ」のショールを肩にかけ正装で
寺院の説明をするガイド

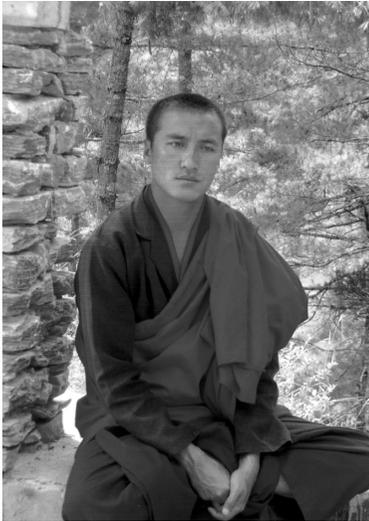


写真2 赤いカムニを身にまとう半聖
半俗の在家僧で「ゴムチェン」
と呼ばれる。

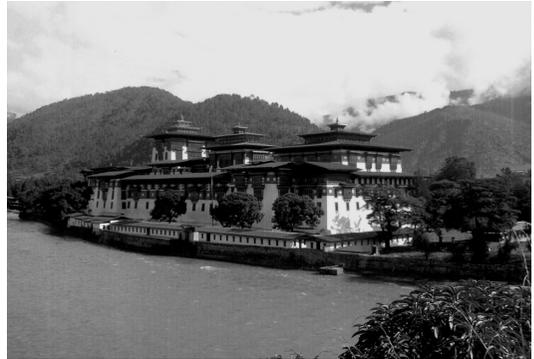


写真5 冬の首都といわれるプナカに建てられた
プナカ・ゾン

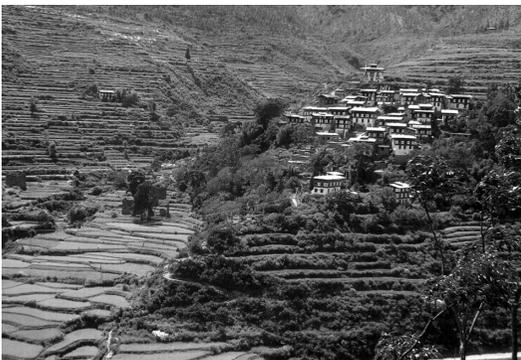


写真3 棚田が美しい西部ブータンのリンチェン
ガン村

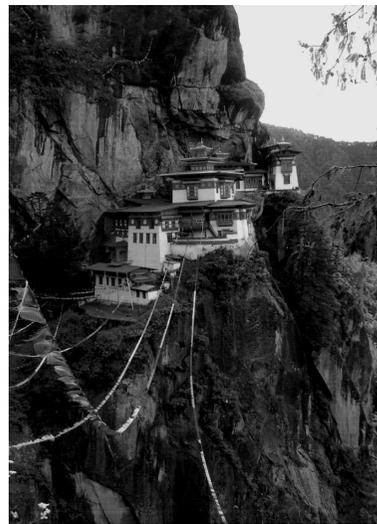


写真6 500 m の切り立った岸壁には
め込まれたように建てられた
伝説の聖地、タクツァン僧院



写真7 緑の回廊が続くブータンの東西を縦断する幹線道路

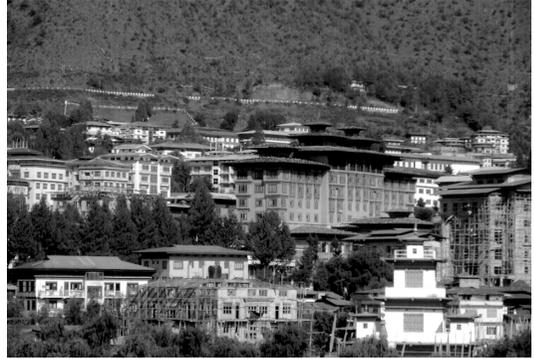


写真8 大型のホテル建設ラッシュの首都ティンブ